

聖書の勇気・・・

村山盛華

奨励者紹介[むらやま・もりよし]

同志社大学神学部教授

[研究テーマ]新約聖書学・初期キリスト教

アンティオキアでは、その教会にバルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、キレネ人のルキオ、領主ヘロデと一緒に育ったマナエン、サウロなど、預言する者や教師たちがいた。彼らが主を礼拝し、断食していると、聖霊が告げた。「さあ、バルナバとサウロをわたしのために選び出なさい。わたしが前もって二人に決めておいた仕事に当たらせるために。」そこで、彼らは断食して祈り、二人の上に手を置いて出発させた。

(使徒言行録 13章1―3節)

ちょっとした勇気

小学5年生まで私は、カナヅチでした(泳げませんでした)。毎年中耳炎を患い、そのたびに「水泳はダメです」と、医者から言われていたからです。また、通っていた小学校にはプールがなかったため、ときおり近くの市営プールへ出かけて行って水遊びをする程度で、海水浴や川遊びにも出かけましたが、泳ぎ方は誰からも教わりませんでした。しかし、泳げなくても、特に支障を感じることはありませんでした。

小学6年生の時に、父の仕事の都合で、大阪市阿倍野区に引っ越しました。突然決まった引っ越しが辛くて仕方ありませんでした。それまで地域のソフトボールチームに入っており、最終学年の6年生になると、レギュラーに、さらに、キャプテンになる可能性もあったのです。さらに、今まで仲よくしてきた友だちと修学旅行に行けるのを、とてもとても楽しみにしていたのです。それがすべて「水の泡」となるのです。どれほど泣き叫び、親を手こずらせたか、今でもよく覚えています。

結局、親の意向に背くことはできず、河内松原市から大阪市阿倍野区に引っ越しました。転校先の小学校には立派なプールがありました。6月に入ると水泳のクラスが始まるのです。クラスメートは「早く泳ぎたい、泳ぎたい」と、うきうきしています。小学1年生からずっと水泳のクラスを受けているので、クラスのほぼ全員が泳ぐことができるのです。一方、私とえば、水遊びしかしたことがなく、全く泳げない。「やばい、私は全く泳げない。それも小6になっても泳げない。恥ずかしい」と、心の中で悲痛な叫びをあげていました。このままではよくないと思い、家の風呂で息つきや潜る練習を必死に行いました。そして、ついに水泳のクラスの初日がやってきました。ここまできたら後には引けません。25メートルのプールに勇気を振り絞り、ざぶーんと飛び込みました。どうやって泳いだのかあまり覚えていないのですが、おそらく、「犬かき」のようなものだったでしょう。途中何度か足をつきながらも素早くプールの底を足でけりとはし、勢いをつけてなんとか泳ぎ切りました。私が泳げないことはおそらく感づかれなかったと思います。とにかく必死で、何度かそのような泳ぎを繰り返すと、不思議なことに水に対する恐怖心が和らぎ、緊張がほぐれていきま

した。水に浮かぶコツも覚えていきました。また、私のような、不細工な泳ぎ方をする他のクラスメートもあり、水泳のクラスもそれほど苦にはならなくなっていました。自分なりに「勇気を振り絞ってやれば、何とかやれるのだ」と、嬉しく思い、自分の大胆な決断に少し酔いしれました。ちょっとした「英雄気取り」でしょうか。

不断的努力と小さな勇気で大変な局面が打開されることがあるわけです。これは、他愛ないエピソードですが、小学生の私にとっては人生最大の危機だったのです。実は、別の危機もありました。全学年900名近くが運動場に会し、校長先生のお話を聞く朝礼というものがあったのですが、当時放送委員であった私が、校長先生がいつも立つ演壇でアナウンスする役を与えられたのです。人前で話すのが大の苦手な私にとって、最大のピンチであったことを今でも覚えています。

私たちの人生において、もっと深刻な問題や困難に直面し、信念をもって決断しないといけない時があります。孤軍奮闘、頑張らねばならない時があります。自分だけが頼りで、必死に頑張っている自分を誉めてあげたい時もあるでしょう。そのような生き方は、ある種の美德として評価されます。

聖霊の働き

さて、今日の聖書箇所は「使徒言行録」です。「使徒言行録」とは、使徒＝遣わされた者、言行＝言葉と行い、録＝記録。つまり、遣わされた者たちの言葉や行いについての文書です。時代は、イエスが十字架刑で処刑され、復活し、復活の出来事を起点にキリスト信仰が生まれた時代です。キリスト信仰とは、「イエスがキリスト（メシア）である」と、信じることです。復活の出来事を経験したことで、「イエスの生涯は十字架で終焉せず、今もなお継続している。死んで終わりではない」と信じる人々が、使徒たちを中心に現われてきた。不思議な現象であります。

使徒たちは、死さえも克服したメシア、神の子イエス、その存在を復活の出来事とおして感じ取った。そしてすべては、神ご自身の計画であったと心から信じ、それを伝えるために各地に出かけて行ったのです。今日の箇所の13章は、パウロを中心に使徒たちが一団となって宣教して行く、その第1回目の宣教旅行が開始されたところです。

新約聖書238頁を見ていただきたいのですが、アンティオキアという町で、預言者や教師たちが集まって、礼拝と断食をしていた。すると、聖霊が彼らに告げた。「バルナバとサウロ（パウロ）を選び出なさい」と。そこで彼らは断食と祈りをもって、二人の上に手を置いて出発させた。聖霊によって送り出されたバルナバとサウロは、キプロス島に向け船出します（13章4節）。そして彼らは、魔術師エリマに出くわし、パウロ（サウロ）は聖霊に満たされ、魔術師をにらみつけてやっつけます。その後、パウロたちはピシディア州のアンティオキアに移動します。

この一連の記事を読んで、興味深いのは、祈りと断食による信仰生活の只中で、聖霊の働きによって新しい事態が作り出され展開していくことです。聖霊とは何か。ある研究者は「神のエネルギー」と捉えます。つまり、ここで、「使徒言行録」を執筆した著者ルカは、人間側の日常的な営みや努力（祈りと断食）と神の働きとの結びつきを表現しています。さらに、聖霊が告げ、聖霊が派遣する、とあるように、人間側ではなく、聖霊の主導権（イニシアチブ）によって事態が展開することが分かります。ここは重要な点です。私たちは自分が主導権をもって人生を歩んでいると自負しています。もちろん、大切なことです。それを軽ん

じるつもりはありません。私たちの努力や判断は、重要です。しかし聖書は、人間側の働き、それに加えて神の働きを語り、主導権はどこにあるのかを教えています。これは、歴史や世界、時代、出来事を神学的に解釈するということにつながります。

私たちの人生において、深刻な問題や困難に直面した時、懸命に活路を見いだそうと努力します。孤軍奮闘、必死に頑張ります。そのような時は特に自分だけが頼りです。その生き方は、美德です。決してその価値は否定されません。しかし聖書は、切磋琢磨、高尚な倫理、あるいは、人間の良識ある判断を単に奨励していません。そこが哲学や倫理学と似て非なるもの、と言われるゆえんでしょう。

神の主導権

絶望に陥った時、人々はこうつぶやくでしょう。私の人生もう終わりだ。私の人生からもはや期待できることは何もない、と。しかし信仰者は問いかけます。「人生から何をわれわれはまだ期待できるかが問題なのではなくて、むしろ人生が何をわれわれから期待しているかが問題なのである」と(ヴィクトール・フランク 霜山徳爾訳『夜と霧 ドイツ強制収容所の体験記録』みすず書房 1956年 184頁)。ここで示されているのは、主体の逆転です。私たちではなく、人生が主体となる。人生を神に置き換えるとよいでしょう。私たちは神から何かを期待するのではなく、神が私たちから何を期待しているのか、と問われる。主導権は神にあるということです。

その後、パウロたちは計3回の宣教旅行を行います。地中海沿岸の主要な都市を中心に旅行を行い、最後にはローマにまで足を伸ばします。パウロの宣教活動は、お世辞にも順風満帆とは言えない、困難に直面する日々でありました。先ほど見ましたように、魔術師との対決がありました。当時の多神教世界(宗教世界)との軋轢があった。また、同じ一神教の中でもユダヤ教の律法解釈をめぐる論争がありました。パウロが、律法はもはや必要でなくキリスト信仰のみで救われる、と宣教したため、彼は多くのユダヤ人から激しいバッシングを受けました。パウロもユダヤ人でありましたから、これは同胞との軋轢です。パウロを殺そうと殺気立つユダヤ人さえいたのです。これだけではありません。赴いた町々で騒動に巻き込まれ、その結果、治安を乱した嫌でローマの官憲に逮捕され度々投獄されました。国家との軋轢です。さらに、パウロが創設したキリスト教会自身の問題がありました。教会のメンバー同士の仲違いやパウロの正当性を疑う人たちもいたのです。それに加えて、古代の旅行者が遭遇するさまざまな難がありました(難船の難、川の難、盗賊の難、海上の難、飢え渴き、寒さなど)(コリントの信徒への手紙二11章23—27節)。

このように、あらゆる方面との軋轢、困難があり、使徒パウロは苦勞に苦勞を重ねます。さらに、彼は持病を患っており、健康状態もあまりよくありませんでした。見た目(風貌)もよくなく、話も上手くなかったようです。そのことを揶揄されることもあったようです。さすがのパウロも「自分が無駄に走っているのではないか」と弱音を吐き(ガラテヤの信徒への手紙2章2節)、「この世を去って、キリストと共にいたい」と現実逃避を示唆することさえありました(フィリピの信徒への手紙1章23節)。宣教をすればするほど困難が立ちだかる状況について、「何度も言ってきたし、今また涙ながらに言いますが、キリストの十字架に敵対して歩んでいる者が多いのです」(フィリピの信徒への手紙3章18節)と嘆いています。

しかしパウロはへこたれなかった。宣教旅行も3回を重ねた時、ユダヤ人の最高法院でパウロは取り調

べを受け、その日の夜、復活のイエスが現れ「勇気を出せ（サルセオー）」（使徒言行録23章11節）と語りかけられました。また、パウロがローマに護送され、到着した時、仲間二人が出迎えに来たので、パウロは彼らを見て「神に感謝し、勇気づけられた（ラムバノー・サルソス）（直訳：勇気を受け取る）」（使徒言行録28章15節）。復活のイエスがいつも見守ってくれている、具体的な手段をとおして勇気を与えてくれている、とパウロは実感したことでしょう。この事情を別な表現で、パウロは説明しています。彼が困難さ、弱さに直面して、神に祈った時、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と神から回答があったと記しています（コリントの信徒への手紙二12章9節）。その神の言葉に勇気づけられた。ただし、事はそう単純ではなく、勇気と言えば聞こえがいいですが、勇気の裏には「忍耐」（耐えること）があります。勇気と忍耐は表裏一体なのです。ここに、聖書的勇気（神の力に支えられて可能となる事態）を読み取れることができます。

先ほど、小学校時代の他愛ないエピソードを紹介しましたが、自分だけが頼りで、頑張っている自分を誉めてやりたい時がある。そのような生き方は、ある種の美德として評価されます。この背後には、ある種のヒロイズム（英雄主義）があります。決して悪くはありませんし、私たちの精神生活において、また社会生活においても一定の機能や役割を果たしています。ただ、聖書は、ヒロイズムとは別のことを教えています。聖書的勇気とは、ヒロイズムや英雄的な自己決断、美德としての決断ではありません。それは、人間側の知恵や洞察、良識ある判断を形成していくための、ありとあらゆる努力をしたうえで、最終的に、神の力に支えられ、すべてを神に委ね、希望の中で待ち耐えるあり方を意味します。言い換えると、究極の主導権は、自分ではなく神にあることを自分の全存在（実存）をかけて体得していくあり方なのです。

2018年6月13日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録